



Master's Lectures – 21

「新渡戸稲造生誕160周年に寄せて」 ～「自分の力が 人に役に立つと思うときは 進んでやれ」～

順天堂大学 名誉教授
新渡戸記念中野総合病院・新渡戸稲造記念センター長
恵泉女学園 理事長

ひ の おき お
樋 野 興 夫
Okio HINO

新渡戸稲造（にとべ・いなぞう：1862 - 1933）は、農学者、教育者。南部藩士の三男として盛岡に生まれる。札幌農学校に入学し、欧米に留学し、メアリー・エルキントンと結婚、札幌農学校の教授に。英語で『武士道』を出版し、第一高等学校長などを歴任。「太平洋の橋たらん」との信念を持ち、1920年、国際連盟事務次長に就いた。著書に『新渡戸稲造全集』（教文館）、『新渡戸稲造論集』（岩波書店）などがある。

筆者の故郷【当時の住所名：島根県簸川郡大社町鶴峠（うど）、現在は、島根県出雲市大社町鶴峠】は無医村であり、幼年期、熱を出しては今は亡き母（96歳で逝去）に背負われて、隣の村（鷺浦）の診療所に行った体験が、脳裏に焼き付いている。そして、人生3歳にして、医者になろうと思った。

712年に編纂された『古事記』に登場する、医療の原点を教えてくれる大国主命の出雲大社から、8キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、筆者の生まれ育った鶴峠である。隣の鷺浦と合わせて、鶴（う）鷺（さぎ）と呼ばれている。713

年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。その村で、筆者の生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。母校の鶴鷺小学校（鶴峠と鷺浦の中間に位置する）の卒業式で、来賓が言った言葉「ボーイズ・ビー・アンビシャス」（Boys be ambitious!）である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク（1826-1886）が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。もちろん、当時の筆者は、クラークのことも札幌農学校のことも知らず、クラーク精神が新渡戸稲造、内村鑑三（1861-1930）という後に、筆者の尊敬する2人を生んだことも知らぬまま、ただ、鶴鷺小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぼっと希望が灯るような思いであった。これが筆者の原点であり、そして19歳の時から、尊敬する人物を、静かに、学んできた。その人物とは、南原繁（1889-1974）であり、上記の新渡戸稲造・内村鑑三であり、また、矢内原忠雄（1893-1961）である。



写真1 鶴峠漁港（鶴峠）



写真2 ウィリアム・クラーク像（羊ヶ丘展望台）

母校の鵜鷺小学校、鵜鷺中学校は、すでに廃校になった。今後、この跡地に介護や終末期医療を行う施設が複数建てられ、「メディカルビレッジ」の拠点となって、地域の方の癒しの場として活用されることを願っている。空家率50%とされる筆者の故郷のような地域では、「メディカルビレッジ=1人の人間を癒すためには1つの村（医療の協働体）が必要である」という考えの下、看護師さん達を中心になってこのような形で空き家を有効活用すれば、「次世代の村起こし」のあり方・モデルを提示する試みともなろう。これは、「故郷の時代的役割」と「次世代の医療のあり方」への意欲的な提言でもある。

「メディカルビレッジ」という言葉が広がれば、「医療の隙間を埋める」具象的イメージとして、「次世代の日本国」の在り方が広く展開されることであろう。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」（新渡戸稲造）、「古いものには、まだ再活用される要素があるのである」（内村鑑三）の教訓が今に生きる。今日の「日本国に課せられた使命=新渡戸稲造 & 内村鑑三の後世への最大遺物」は、人類の共通のテーマである「医療」を通して具現化されよう。「最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである」（新渡戸稲造）。

南原繁が東京大学総長時代の法学部と医学部の学生であった筆者の2人の恩師から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。南原繁は、「高度な専門知識と幅広い教養」を兼ね備えている人物であり、『視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む「具眼の士」』である。これまで学んできた南原繁の言葉は、まさに「言葉の処方箋」である。人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」であると実感する深い学びの時間が与えられている。その時、その人らしいものが発動してくるであろう。そして、「役割意識 & 使命感」の自覚へと導く。「練られた品性と綽々たる余裕」は「教育の真髓」である。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する。「国民の理想とビジョンをつくり出すのは、根本において教育と学問のほかにはない」（南原繁）。一見「理解不能モード」で

ある複雑な現代社会・混沌の中での「一筋の光」を感じる日々である。クラーク精神が、「内村鑑三 & 新渡戸稲造」へと導かれ、英文で書かれた『代表的日本人』（内村鑑三）& 『武士道』（新渡戸稲造）は、若き日からの座右の書である。そして、南原繁 & 矢内原忠雄と繋がった。「人生邂逅：人生は巡り合い」であり、人と人とは非連続性でありながら連続性をもっているのである。筆者は、現在「南原繁研究会」の第3代目の代表を仰せつかっている。

「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」の風貌こそ、現代に求められる「学者の風貌」でないだろうか。南原繁は、「教養ある人間とは、自分のあらゆる行動に普遍性の烙印を押すことであり、自己の特殊性を放棄して普遍的な原則に従って行為する人間のことである」と書いている。「それは人間の直接的な衝動や熱情によって行動する代りに、つねに理論的な態度をとるように訓練されることである。」（南原繁著作集第三巻）とも記しており、また、「時代を動かすリーダーの清々しい胆力」としての「人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇氣ある行動」（南原繁著の「新渡戸稲造先生」より）という文章が思い出される今日この頃である。我々には、出来ることとできないことがある。出来ることは頼まれればこぼむものではない、行動への意識の根源と原動力をもち、いやとは言わないことであろう。

「責務を希望の後に廻さない、愛の生みたる不屈の気性」が、「人生の扇の要」の如く甦る。『生活環境や言葉が違って心も通えば友達であり、心が通じ合う人と出会うことが人間の一番の楽しみである。』（新渡戸稲造）を体験する日々でもある。『楕円形の心～がん哲学エッセンス～』（春秋社）、『種を蒔く人になりなさい』（いのちのことば社）にも「内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄」について記述した。すべての始まりは「人材」である。「はしるべき行程」と「見据える勇氣」、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る「小国の大人物」出でよ！

以前、スペシャルドラマ「津田梅子～お札になった留学生～」がテレビ放映された！津田梅子（1864-1929）は、聖徳太子（574-622）⇨新渡戸稲造⇨樋口一葉（1872-1896）に続く、新5000円札の顔であ

る。女子教育に大いなる理解を示した新渡戸稲造（東京女子大学 初代学長）が援護した、河井道（1877-1953；恵泉女学園 創立者）、津田梅子（女子英學塾 創立者）、安井てつ（1870-1945；東京女子大学 第2代学長）の三人に共通するのは、『種を蒔く人になりなさい』である。「新渡戸稲造のNHK大河ドラマ」の製作は歴史的要請であろう！まさに、「冗談を本気で実現する胆力」の試金石である。

今年（2022年）は、「新渡戸稲造生誕160周年記念」シンポジウムが企画された。「今、再びクラーク精神」&「今、再び新渡戸稲造イズム」の時代的到来である。人間はお節介をやってもらいたい生物である。でも「余計なお節介」は嫌である。要するに、「偉大なるお節介」とは、他人の必要に共感することであり、「余計なお節介」と、「偉大なるお節介」の微妙な違いとその是非の考察がこれからの大きな課題となる。また、他の人々に注意を向けるには、「暇げな風貌」が必要であると考え。「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」は、悠々と謙虚を生むことであろう。「偉大なるお節介症候群」が蔓延化すれば、如何に、「悩める人々の慰め」となろう。「ユーモア (you more) に溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物」の育成訓練でもある。まさに、「本質的な人間教育の見直し」の時代的様相である。新渡戸稲造は、『最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なるものである』とは普遍的に真理である。」と述べている。ごく簡単に言えば、「弱いものいじめをするな」ということであり、「なすべきことをなそうとする愛」ということであろう。「他人の苦痛に対する思いやり」は、教育の根本である。

1933年3月3日にも、今回と同様に三陸で地震の大災害があったと記されている。その時、新渡戸稲造は被災地宮古市等沿岸部を視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした新渡戸稲造は「Union is Power」（協調・協力こそが力なり）と当時の青年に語ったと言われている。まさに、今にも生きる言葉である。

広辞苑によれば、国手とは「国を医する名手の意」、名医また医師の敬称とあり、「医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」とのことであ



写真3

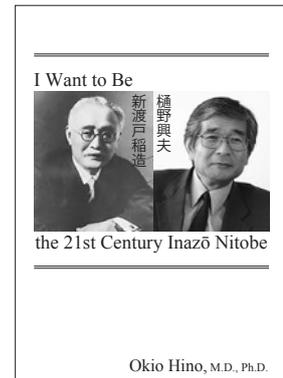


写真4

る。医師の地上的使命と同時に「日本の傷を医す者」（矢内原忠雄：1945年12月23日の講演）が蘇った。政治家にして医師のセンスを兼ね備えるのは至難のことである。しかしその稀有の例が過去の日本にもあった。それを成し得た人物は、後藤新平（1857-1929年）である。1882年、岐阜で暴漢に襲われ負傷した板垣退助を医師として手当し、板垣退助に「医者にしておくには惜しい。政治家になれば、かなりのものになるであろうに」と言わしめた後藤新平は実際、関東大震災後の東京復興の壮大なビジョンを描いたリーダーとして「理想郷を作りたいと願う熱い思い」を持ち「行動する人間」であったとのことである。後藤新平は、新渡戸稲造をいろいろな局面で抜擢した人物でもある。

2003年に初版『われ21世紀の新渡戸とならん』、2018年に新訂版、2019年4月には英語版『I Want to Be the 21st Century Inazo Nitobe』が発行されることになった。タイミング的には「新渡戸稲造記念センター長」就任記念ともなった。驚きである。人知を超えて、時が進んでいることを痛感する日々である。ここに、「新渡戸稲造記念センター」の開設の歴史的意義があろう！

筆者は2001年より「がん哲学」の提唱を続けている。2008年には、医療現場と患者とをつなぐ「がん哲学外来」を開設し、活動を行っている。『がん哲学』とは、「がん細胞から人間社会の病理をみる」である。

「理念」：3カ条

(1) 世界の動向を見極めつつ歴史を通して今を見ていく

- (2) 俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成
 (3) 複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種蒔き

「風貌と胆力」：7カ条

- (1) 自分の研究に自信があつて、世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度
- (2) 軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする
- (3) 学には限りないことをよく知っていて、新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する
- (4) 段階ごとに辛抱強く、丁寧に仕上げていく。最後に立派に完成する
- (5) 事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを十分に発揮して大きな仕事をする
- (6) 自分のオリジナルで流行を作れ！
- (7) 昔の命題は、今日の命題であり、将来のそれでもある

「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こすものであろう。『向上心のある虫「新渡戸稲造の学び」& 俯瞰的ながん病理学者「吉田富三（1903-1973）の学び」』からみる「現代の日本社会の病理」の視点は、「Origin of fire」の如く「医療の隙間を埋める」試みとして

- (1) 「明晰な病理学的診断」
- (2) 「冷静な外科的処置」
- (3) 「知的な内科的診療」
- (4) 「人間力のある神経内科的ケア」
- (5) 「人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学」

が全国に広がることが期待される。

1860年代遣米使節団（勝海舟らがいた）が、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「学者の風貌」でなかろうか。

「日本国のあるべき姿」として「日本肝臓論」を展開する。日本国＝肝臓という「再生」論に、行き詰まりの日本を打開する具体的なイメージが獲得さ

れよう。人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。遡って新渡戸稲造は国際連盟事務次長時代に、「知的協力委員会」を構成し知的対話を行った。そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表するアインシュタイン、キュリー夫人もいたことは特記すべきことである。今こそ国際貢献として「21世紀の知的協力委員会」の再興の時である。

- (1) 賢明な寛容さ (the wise patience)
- (2) 行動より大切な静思 (contemplation beyond action)
- (3) 紛争や勝利より大切な理念 (vision beyond conflict and success)
- (4) 実例と実行 (example and own action)

を実践していくことが肝要であると考えている。

昨年（2021年）の誕生日（3月7日）記念で、万座日進館の『誕生日会』に赴いた（3月13日）。翌日（3月14日）の朝は、講演の機会が与えられた。今回は、『新渡戸稲造セミナーハウス』設立の話で大いに盛り上がった。私は、『われ21世紀の新渡戸とならん』（2003年イーグレイブ発行）の最終章の『「今世紀の温泉と健康戦略～「ひも亭主」目覚めよ～」』に、『「新渡戸セミナーハウス」を造れ！』と記述している。これは、私が、『全国女将サミット 2003年東京～旅館業変革のとき、挑戦のとき～change, chance, challenge～日本文化』で講演した時に述べたものである！約20年が過ぎて、いよいよ『新渡戸稲造セミナーハウス』設立の夢の現実化の時代的到来である。不思議な時の流れである。「新渡戸稲造セミナーハウス in 万座」が企画される予感がする！また、帰京途中、軽井沢を散策した。私にとって、内村鑑三『石の教会』、新渡戸稲造初代学長『軽井沢夏季学校』の軽井沢は、特別な思いがある。「新渡戸稲造セミナーハウス in 軽井沢」も企画されることであろう。

5月22日に早稲田スコットホールにて『新渡戸稲造セミナーハウス』キックオフ講演会と筆者が作詞した「ほっとけ 気にするな」のライブ初公開が「若き音楽家を育てる会」の主催で行われた。多磨

霊園で眠る内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄への最大のはなむけである。

筆者は、2007年から、新渡戸稲造『武士道』と内村鑑三『代表的日本人』の読書会を毎月行っている。「継続は力なり」を実感する日々である。まさに、

『役割意識と使命感～「新しい自分の発見 & 他人の理解が深まる」～』である。これこそ、「自分の力が人に役に立つと思うときは進んでやれ」（新渡戸稲造）の時代的タイミングであろう。